



餓鬼随想録 Ⅱ

折々に寄せて

福瀬餓鬼

下手な印

「君、印刻ってくれない？」

「誰のですか？」

「僕だよ！」

「先生の印ですか！」

「うん」

「先生、自分で刻ってんじゃないですか」

「うん、小さいのが欲しいから…。年寄りには小さい印はうまく刻れないもの。それに箱書きに使うから僕のを押すとうまくつかないのよ。君、専門家だからうまくつくだろ？」

「板につけばいいんですか」

「うん」

「つけばいいなら簡単です。直ぐ刻って次に持って来ます」

「そう、じゃたのんだよ。これで安心だ」

或る日曜日午後、中川一政宅に若い書家を志している者達が四、五人呼ばれてお茶を飲み乍ら寛いでいる時、突然僕の顔を見て思い出した様に言い出したのである。僕もびっくりしたが囲りの者達が先生の顔を見たり僕を見たりで驚いた。篆刻をやっているとは言えまだまだ青二才の僕に何故そんな事を言ったのか理解出来なかったのである。本当に困って言ったのか、一政ともなればもっと適当な人が居ただろうに。いずれにしても今もってその真意の程はわからない。ともあれ天下の一政から頼まれた訳だから勿論喜んだ。直ぐ家に帰り刻った。十二、三箇出来上がったのは朝の五時過ぎである。うまく板につくかどうか試さねばならぬ。菓子箱や陶器の入っている蓋を集めて押してみた。何箇かはうまく出来た。板は紙と違って堅くて融通がきかない。印の面と板の面とがぴたっと合わないと印泥がつかない。一政は印材を陶土で作って焼き上げる（陶印）ので焼いた時に歪んでしまう。やはり年寄りの一政には板に押す陶印は出来ないかもしれない。私達篆刻をやる者は主に石印材を使うので印面を真っ平らにするのは簡単な事である。しかしこの時ばかりは石と言う訳にはゆかぬ。俺も陶で作って専門家の違いを示さねばならぬ。已に陶で焼き上げたものを百箇位作って持っているので大きさを適当に選んで刻った。

一寝入りして目が覚め昨夜出来上がった印影を再び視た。「あれ一、何だこりゃー」感心しない。出来上がった時は確かに良かったのに寝て起きたらもう駄目だ。「えーいくそ！」又刻り始めた。その後どれだけ刻っても不満である。もう出来ない、困った。その時ふと思い出した。

一政宅からの帰りの新幹線「こだま」。岡山からいつも来る仲間がいる。熱海から豊橋方面は一緒である。

「福瀬さん！あんた今夜寝れるか？」

「寝れるかって？それ何？」

「だってさ一政先生に印をたのまれて、俺だったら心配で寝れんぞ…」

彼は真面目、正直者である。

「でも、押してつけばいいと先生、言ったじゃあない。つけばいいなら誰にでも出来るよ。心配なんていらんよ…」

「そんな事言ったって…」

僕は他人には自分で言っておき乍ら実際、事に当たってみると全く違った気持ちになってしまう。うまく刻ってやろう。専門家の違いを見せ付けてやろうなんてけちな欲が働く。気持ち良く出来る訳がない。

しかし出かける時がやって来た。仕方がない。何でもどれでも持って行かねばならぬ。

「先生、印持って来ました」

「あ、そう。もう出来たの？」

「一応出来ました…」

五、六顆と印影を差し出した。どんな顔をするか見る元気もない。しかし相手は印影を睨んでいる。

「ありがとう。これは、使うのが楽しみだ。でも君の印、高いんだろ？」

「いや、幾ら高くっても先生の絵よりはず一っと安いですよ」精一杯の虚勢である。

「あ、そう。それじゃ安心だ」

どうもこちらが心配した程の事は無かったかに思えたが、今思うと一政と言う人は他人をキズつける様な事はめったに言わぬ。一生懸命であるか否かだけを見る。良く出来ているかどうかは次の判断である。所詮、私程度の事は初めから承知の上の事であつたろう。

その後、印を使ったかどうかはわからないし未だに箱書きに押したのを見た事もない。勿論、ビター文戴かないうちに一政も旅立ってしまった。

今、視れば恥ずかしく、そして又懐かしい印である。

私が将来、日本一の書家になり、文化勲章も必ず天皇陛下から戴くと堅く信じて疑わない男がいる。田崎真一、私の幼馴染みである。小、中、高校と一級下であった。特に中学校の時に習字が好きで、年下の彼の方が腕が良く、字では私より先輩格であったから、大変親しかった。彼は学年では常に首席であり、スポーツもテニスがうまかった。何事に於いても他を引っぱって行く魅力を持っていた。その為か上級生の目に触れ、”生意気”と何度か校舎の裏へ呼び出された事もあった様だ。その彼が、高校を境に筆を持たなくなってしまう。後に彼の口から直接聞いたのであるが、「福瀬の書くのを見ていていやになった。」そうである。勿論私の様には書けなくなったと言う事らしい。私の良き親友であり、ライバルであり、一番の理解者でもあった訳である。大学卒業と同時に野村證券に入社し、三十七年勤め上げ、昨年八月で退職した。私の三十代、四十代、五十代、手短かに言えば、六十一才に至る現在迄、何等浮かばれない時を過ごした事を誰よりも良く知り、陰になり日向になって力を貸してくれた。

1988年にこんな事があった。彼は野村證券から中国銀行の「中銀投資顧問」へ部長として執行した時である。丸三年経た頃、「岡山で個展をやれ！」と言う。「やってもいいが売れるか？売れなきゃ駄目だぜ。」「よし、俺に任せろ。必ず売ってやる。」「そんならやる、どれ位の値段の作品がいい？」「一点は一点だから高い方がいい。一点50万以上、200万位のものも一点書け！」「おい、大丈夫か？」「任せろ！」、と言う事で張り切って作製に打ち込んだ。

個展の場所は岡山一の老舗、天満屋デパート。二人で打ち合わせに出かけた。先方の責任者が言う。

「田崎さんの方で如何程買って下さるお客様がおられますか？」

私は馬鹿な事を言うなどと思い、「デパートが売って下さるんでしょう。」と言えば、「正直なところ書はなかなか売れませんので…。」田崎が言う。「幾等売ればいいんかね。」「片手位お願い出来れば助かります。」「よし、わかりました。500万でしょう。売りましょう。」大見栄を切ってしまった。デパートを出るや否や「おい、500万なんてデカイ事言って、大丈夫か？」「福瀬、何でもやってみにゃあわからんて…。」「おら、知らんぞ…。」

いよいよオープンの日になった。午後五時からパーティーを個展会場で開いた。三時過ぎに責任者が来た。「田崎さん、オープニングには70名位と伺っておりましたのでオードブル、ウイスキー、ブランデーも最高級のもの、ビールも全て準備いたしました。出席者の返事が今のところ25、6名しか来てませんが…。」「25名？おかしいな、そんなはずがないがなあー。いや、返事が来なくても50人位は来るだろう。」不安を払いのける様に自分に言い聞かせている様だ。私もこれはどえらい事になったと思ったが、今更何も言う訳にはゆかぬ。唯祈るばかりである。ところがである。開会三十分程前から来るわ、来るわ、

「田崎さん、忙しくて返事出せなくて申し訳ありませんでした。何が何でもと思ってあわてて来ました。」「いや、有難う、有難う。」来る人、来る人達に即座に水割り、ビールを勧める。私も田崎も地獄から這い上った思いである。会場は広いと言っても、70人も80人も入れば超一杯である。堅苦しい挨拶は抜きで来た人達は結構上機嫌になった。ムードがいやが上にも高まった。責任者が「田崎さん、一応皆様がお揃い様ですから、ご挨拶をなさったら如何でしょう。」最初はやらぬはずであったが田崎も私もうれしい。「よし、俺は挨拶するよ。」「そうか、やれ！」「皆様、お忙しい中来て下さって有難う。個展をやる餓鬼さんは私の竹馬の友で、私は将来必ず日本一の書家になると信じています。身びいきと言われれば正にそうだと思います。親が子に期待すると同じ様に、私は餓鬼さんに日本一になってほしいと思っております。有り余る才能と情熱に溢れる彼ですが、残念乍ら唯一つ足りぬものがあります。それはお金です。餓鬼さんは心はいつも豊かですが、サイフは貧乏です。何とか皆さんの力で餓鬼さんを日本一にしてください。」

と言う事は簡単に言えば今茲に陳列されている作品を一点でいいから買ってやってください。二点でも結構です。よろしく願います。」

割れんばかりの大拍手が一堂に鳴り響いた。次に私も何か言わされたが、気が顛倒していたとみえて何を言ったか覚えていない。

蜂の巣を突いた様に会場は大さわぎ、最高級のウイスキーの水割りもきいて来た。クラブのママさん達も店の若い子を連れ立って、パーティー後の客引きに懸命である。

「ネエー社長、一点買ってあげなさいよ。」「そうだな、よし、俺はこれだ。”徳”文句が気に入った。」「社長、徳があるからね…。」てな具合にあつという間にポンポン売れた。田崎も私も有頂天である。田崎が言う。「福瀬、どうだ。俺の言った通りになったろう。」「本当だ。うまくいったな。」「ところで何点位売れたろう。」「ざっと500万は超したぞ。」「そうか、パーティーが終わる迄にどうだ、あと200万位はいくぞ！」最終的にパーティーだけで、売り上げ700万は超えた。田崎と私がパーティー終了後会場を出る時は、入口からエレベーターまで天満屋従業員一列に最敬礼のお見送りである。会期六日間、毎日田崎は時間を作って会場に詰めた。パーティーに出席出来なかった人達が、随時来てくれて買ってくれた。「福瀬餓鬼作品展」盛会なうちに終わり、総売上げ1200万円也であった。後日天満屋デパートから振り込みがあった。「田崎、個展の金が入ったぞ！」岡山へ電話した。「おゝ、そうか、幾ら入った。」「830万圓だ、どうする。」「額屋や書道用品屋に借金があるだろ。」「そりゃ、あるよ。」「先ず払えや。」「払ってもいいか。」「いいよ。」「じゃ、そのうちにいっぺん、又そっちへ行くから。」

広島額屋へ五年来の蓄積借金が500万、筆墨店に150万、早速支払った。長い間風呂に入らず、久しぶりにアカを洗い流した様なすがすがしい気分である。残った金を持って田崎に逢いに行った。「残った金、どうする?」「どれ位残った?」830万引く650万で、「180万残った。」「えゝ、180万?何、そんなに借金してたのか?」「うん、払えと言うから半分位にしようかと思ったんだがお前、皆払えと言うから…。」「まあ、払ったんならいいじゃないか。」「それでも180万あるから取っておけよ。」「俺はいいよ。給料は毎月もらえるし。まだ金があるだろう。」「でも何か悪いな…。」「じゃ今度又個展をやって儲かった分を半分半分にするか。」「よし、そうしよう。」決算報告は以上であった。

その後、第二回を天満屋でやったがバブルが弾けさんざんであった。山分けの話もパーになって現在に至っている。

私はこの岡山の個展を通して田崎の人柄を改めて再確認した。彼は言う。「俺はあの個展で岡山で勤めて皆んながどれ程、俺を評価してくれているか知った。あれだけの人達が俺の呼びかけに答えてくれて本当にうれしかった。しかし当然答えてくれると思った人が、顔も見せないし、たいして当てにもしていないのが田崎さんには日頃お世話になっているからと馳せ参じてくれる。福瀬、人間ちゆうもんはさまぎまだな。」1200万売れたのはやはり唯売れたのではなかった訳である。

1997年3月

目は盲なり

書は心なり

前略お尋ねのありました「書を鑑賞する時のポイント」に就いて、私は今まで自分の勝手に判断して居りました。改めて問われますと、「はて…」と考え込んでしまいました。

人様に「書はこう見なさい」などと偉そうに言えませんが、五雨先生だけにでしたら許していただければ、私の意見を申し上げます。

「書は心の鏡なり」と言われる様に、文字は其の人となりや正直に表す。美しい文字を見ると、それを書いた人が良い人に見えたり、立派な人に思えたりする。文字は約束であるから、正しく意志が伝わらねばならない。それが、我々が平生実用文字として文字を扱っている面である。反面、実用をも兼ね乍ら、それに美意識を働かせ、より美しく表現する事が出来ないだろうかと考え、研究がなされ、発達したのが漢字である。

古来から漢字を毛筆で書き芸術にまで高め様と、特に毛筆や紙、墨、硯と言った用具の発明、発見に依り、色々な試みを経て現在に至っている。我々文字を考える時、実用面と鑑賞（芸術）面とを混同して、全て実用面でのみ判断し様としている場合が多い様に思う。

例えば、先に言った美しい文字を見ると、その人柄返しのばれるが、ただ単に正しく、わかり易く、整ったきれいな文字を見て、その人が立派であると判断していないだろうか。「美しい」と「きれい」とは同じ様で、実は大違いである。「きれい」は実用、乃ち常識面での判断で、「美しい」は鑑賞面で常識をはるかに超えた処まで価値範囲が広がる。故に文字の良否の判断は、自ずと判断する人の見識が全てを決定すると言えよう。

長い間書に携わって来た私はいつの間にか文字で人を判断する癖が身についてしまった。良い事かどうかは別にして、自分では結構重宝している。当たり外れは滅多に無いと満足している。私には文字を見る事は人を見る事になる。とは言うものの、実は非常に困っている問題が一つある。それは、他人のことであれば気楽なものであるが、自分の文字を見て、どうかと自己判断をする時である。自分の駄目さ加減がいやと言う程わかるのである。その都度直さねばと思うが、自分一人の力ではどうなるものでもない。「人間の力など微々たるもので、全て神や仏の慈悲に依って生かされていて、自分の作品とは言え、神や仏の力で書かせていただいているのである。良いとか悪いとか判断すべきではない」と思って、神や仏にすがるとも方法の一つであろうが、今の私は我欲が強くて、そんな気にもなれない。個展をして何度も他人に見てもらって批評を得るのが私には一番人間改造になると思っている。

今までは私の思っていることを言った迄だが、一般的にはどう文字を見たらいいか、二、三、目安になる事を挙げよう。

一、 明確である事。

- いくら形が歪んでいても、一点、一画が明瞭である。行書、草書であっても、どの様な筆順で、どう書いてあるのかははっきりわかる事。

二、 文字の懐が広い事。

- 大らかで、ゆったりとした気持ちを感じさせてくれる。

三、 文字の書き出し（起筆）、書き終わり（終筆）がしっかりしている事。

- 文字を書く時の心構えがしっかりして油断なく書かれているかどうか…。達筆にまかせて、軽率にならぬ様に。兎角専門家の陥りやすい落とし穴である。

以上が、満たされていれば、一応良しとせねばならない。

“人一たびして之を能くすれば、己之を百たびし

人十たびして之を能くすれば、己之を千たびす” 礼記

この精神で練習をすれば、誰もが達筆になり、人から誉められる様にはなれるが、人から尊敬される様な文字を書くには、先ず、人から愛され、尊敬される様な人間にならなければ不可能である。

お役に立てるかどうかが心配ですが、思い付くまま書き記しました。取り急ぎ乱筆にて失礼申し上げます。

頓首

鈴木五雨先生

馬鹿

「君、大変だね」「はい、毎月、月末に金が無いので大変です」

「そんなことじゃないよ、君、書を書いているんだろ？」

「はい」

「書は大変だよ」

「そうですか？僕はちっとも大変じゃありません！」

「あ、そう。僕は大変よ、油断できないもの…」

四十才少し前の頃であつたろうか、一政*1 宅で二人で向かい合っている時の会話である。大変だとか油断出来ないなど何のことかさっぱりわからない。

「先生、書を書くのにそんなに大変ですか？」

「うん、僕は書を書こうと思うと先ず訪ねて来そうな人を書き出して順番に二、三日は来ないでと電話をするの、もう誰も来ないなと思うと安心だろ、そして次の日から墨を磨るの。書き始めても直ぐには調子が出ない、その次の日位からやっと気が入る、それでも書いたものが全部いい訳じゃない、書は大変よ。」

「先生、随分と七面倒臭いんですね、僕なんか書けと言われれば今直ぐにでも書けますけど…」

「そう、君はいいね」

一政は精神を問題としているのに、僕は技術を頭において話していたのである。これはいくら話しても無駄だと思うと、そこで話を断ち切るのが一政流のやり方である。

僕は自分を馬鹿と思った事はない。自分の考えに忠実なだけである。故に他人の意見を聞いても鵜呑みにはしない。むしろ右と言われれば左じゃないだろうかと思う事は常である。そんな風だから本当にわかるには大変時間がかかる。一政と付合って何を私に言わんとしたのか気付きわかるのに二十年かかってしまった。やはり馬鹿と言われても仕方が無いか…。

*1 一政

→中川一政。1893 年生まれ、洋画家。

小さい時から僕は生意気である。その上負けず嫌いで強情である。何でも他人よりは自分の方が良いと思っている。ところがその実失敗の連続で後悔ばかりしている。そして四十三年も生きて来た。不惑という言葉があるが僕には全く当て嵌まらない。中川一政が「正平（山田）さんは確固たる考えを持っていた。しかし自分の考えよりいい考えがあるのではないかとたえず思っていたのであろう。それが精進する人の心だ。」と言っている。

自分には何の考えもなくせに自分のやる事が一番だと思っている僕は失敗ばかりが当然である。「瘦が治っても癖が直らぬ」と母がよく叱ったが案外死ぬまでこの癖は直らないだろう。

五年前に中央公論の画廊で個展をやった時は丁度一政さんを知って間もなくである。会って話していると何か体に熱い力を感じて生来の生意気に一層加速がついてしまう。その勢いをかってやったのが五年前である。その時の作品をみると下手で拙いが威勢がいい。五年後の今は少し羨ましい気がする。

一政さんはヨーロッパへ相撲を取りに行ったと言う。毎日毎日美術館へ行ってぶつかり稽古をしたと言う。僕もそれをやろうと相手に一政さんを選んだ。相手に取って不足はない。土俵の真ん中で足取りにでも行ってひっくり返してやろうとその機会を狙っているが未だに果せない。どんな時でも油断がない。油断がないから隙が見えない。悔しいが回しに手もかからない。だがまだまだ諦めるわけにはゆかない。相手も人間である。いつか一度位は尻もちをつかせてみせる。

申し合わせた訳でもないが奇しくして展覧会も同じ日から始める事になった。向こうは高島屋でこちらは神田の古本屋街、古書センターである。お互いに良い場所である。回しに手がかかるかどうか、ひっくり返す事が出来るかどうかよく僕の作品を見て下さい。そして何かうまい手があればこっそり教えて下さい。

昭和五十三年九月

福瀬餓鬼

書家

私を紹介する時、誰もが決まって言う。「書家の」とか、「書道家の福瀬餓鬼先生です」。

私はこの肩書きが好きではないが他に良い呼び方が思い当たらないので仕方がない。大体「書」と言えば床の間とか掛軸とかカビ臭いものを連想してしまうだろうがコンピューター時代ともなれば当たり前である。

元々「書」と言うのは実用から始まり毛筆の工夫発明、その効能から人間の心の働き、精神状態までが明確に表現される事に気付き芸術として尊ばれるに至ったと思う。

中国唐時代に日本からも遣唐使として留学僧が中国に渡り多くの進んだ文化を学んだ。帰国に際し自分の師匠との今生の別れを悲しみ、一幅の書を懇願して持ち帰った。それを床の間に懸け日夜師匠と対面したのが掛軸の始まりと伝え聞く。墨蹟と言われる禅僧の書はこうして日本のお茶人の見識に觸れ尊ばれ今日に至っている。

確かに墨蹟と言われる書を視ると人間の品格が明確に伺い知る事が出来る。同じ人間であり乍ら唯々驚くばかりである。所詮私など書をやっているとは言え門前までも行けそうにもないが一生懸命頑張るしかないと思う。

古墨

仕事柄墨に興味がありこだわる。新しいものは勿論であるが、百年も過ぎると古墨として新しいものでは表せない墨色が得られる。丁度ワインやウキスキーが熟成するのと同じで何とも言えない味わいがある。好みの世界であるから、何が良いと言う基準が無いと言ってよい。何時何時作られたもので価格は幾等と言っても、磨って墨色を視ないと無暗に手は出せない。とは言え高価なものは今までの経験から言えば良質で美しい。仲間中では、明墨（中国明時代）は大きさ、質にも依るが一千万、かけらでも何百万である。だいたい我々程度の者の処へは来ない代物である。

以前（二十五年位前）中川一政宅で先生の書を見せてもらった時に

「先生、墨色がいいですねえー。どんな墨で書いたのですか？」

「君、墨がわかるの？」

「わかるなんて言えませんがこの墨色は今まで見た事がありません」

「あ、そう。墨が良いと言ったのは君が初めてだよ。見せようか」

凡そ縦が二十センチ、横が八センチ、厚さが二センチ五ミリ位であったろうと思う。明墨だと言われて、思わず

「先生、すごい墨ですねえー。こんな墨で書いてもったいないじゃないですか」

「しかし墨は使わなきゃ生きないだろう」

「そうですか…」

何とももったいないと思った。

それから十年もしないうちに墨色が変わって来た。どうみても新しい和墨である。

「先生！最近墨色が変わりましたね」

「うん！沢山書き出したからあれはもったいないから…」

それみろ、生きるとか生きないとか言っていたくせに…。

何でも岸田劉生から

「中川、墨が手に入ったから見に来ないか」と誘いがあって出かけた。見ればすばらしい墨である。

「僕に譲らないか？」

「馬鹿言え、俺の目の黒いうちは誰にも譲るもんか！」と言われて以来ずーっと頭から離れず墨、墨と思いつけていた。

劉生亡って二ヶ月位経ってからふと墨の事が思い出され直ぐ劉生宅へ出かけたが、少し前に道具屋が持って行ったと言う。残念もう少し早く気付けば良かったと思っても後の祭り。

それから五十年目に美術商が

「中川先生、墨がありますが如何でしょう」

見れば正しく劉生の明墨である。漆と桐の二重箱の桐箱のふたの内側に岸田劉生のサインと押印、____、____、安田鞞彦、と四人の手に渡り、五人目に中川一政となっている。

「物事は何でもあきらめたらいけないね。思い続ければきっと果せるから…」

「先生、では次は僕ですね」

「うん、思っていたらいい…」

中川一政も亡って早十五年。

私の処へ来そうな気配は今の処皆無である。